

「紅葉狩」の更科姫

六代目 尾上 梅 幸

〈出典：「演芸画報」大正5年1月号〉

実は鬼女、これは団十郎さんと亡父以来みんなもぎらに演ったものでもあり、時候も違いますから、遠慮したのですが、帝劇では初めてと云うので出しました。すると都の青々園さんの御評に依りますと「梅幸の鬼女と幸四郎の惟茂とをあべこべにしたらと思っただ、要するに今度は梅幸が短い籤を引いている事を優の為に気の毒と思う、」又「執心の鬼」でも「宗十郎のヒステリーな夫人が一番目に付く。梅幸がその良人になったは、当人の立場からいっても損でこれもあべこべに役を振ったら、此人が活躍したろう」と同情して下されたのは感謝の至りに絶えないのですが、帝劇では奥役がいて役を納めるというのではなく、謂わば命令的とでもいうわけで、又一つには役を替えて見せると云う営業的手段もあるのです。

それに此役は築地の団十郎さんが苦心をされたものですから、出来る限りは振の手付や、手の反し方、背後へ手を衝くとしても、おじさんはすぐと無雑作に衝かないで、ぐっと背後へ手を反して廻すようにして衝いていましたから、旨い拙いはさて措いて、おじさんの遣った通りにし、惟茂に顔を見られる時に恥かしく反むけるように慎んで努めて演っているのですが、どうせおじさんのようには行きませんから、見物は許してくれますまい。併し又銘々に特色があって、酒の好く人に甘い物は向かない道理ですけれど、私としては自分でこうも考が縦合ありましても、そうするとおじさんに対して不実になりますから、自儘の振は決してしないのです。又此役はどこと云ってむずかしい所はないのですが、前の盃の件での思入は自分が曾つておじさんの時腰元をしていましたから、今度はいつぞやの歌舞伎座の時よりも、猶一層努めて演っているのです。併し役の心を考えますと、鬼が化けているのですから、なんにもないのですが、そこをいつものお姫様の気で、秋波を送るとでも云いますか、あすこを飽まで生ぶな男の肌に触れた事のない風になっているのです。

それから「心も晴れて曇りなき云々」のあすこの振を演った人に聞くと、私のは一寸違うと云われましたが、私は腰元でおじさんに掛かった時は、ああ遣っていたと覚えていたので違っていると云われても、半信半疑で覚えたままを演じています。それにおじさんはあの年配でしたから、赤姫の吹輪で遣りましたが、本当なら下げ髪と思えますものの、これも在来りにしています。後シテの鬘は鯨を入れずに遣っているのが手前味噌なのですが、おじさんも入れなかったのです。あの火焰を吹くのは、全体今日になって見ると、なんだか可笑しいような気がしますし、我々が遣ると小細工などと云われましようから、止すとなると、なぜ火を吹かないと言出されますなぞは、世間は何事に依らずそうしたものですな。そうして此前も今度も自身で堀越さんに断りに行って演じているのです。そこで部屋へ小堀遠州が村備中へ送った手紙の一軸を掛けました。それはその文中に「さほ山

の風の心もしらずして紅葉見むんとてこよひふかさん」とあるのを「紅葉狩」に利^きかして、一寸風流がって掛けているのです。（すの字記）